



Blue
Planet
Prize

1999年6月9日
財団法人 旭硝子財団

1999(第8回)「ブループラネット賞」の受賞者決定!

保全生物学を発展させ、地球環境保全
のために人口爆発に警鐘を鳴らした

ポール・R・エーリック博士
(アメリカ合衆国)

中国に環境保全の法体系を確立して、
広大な国土の保全に尽力した

曲格平(チュ・グエピン)教授
(中華人民共和国)

財団法人旭硝子財団(理事長 古本次郎)の地球環境国際賞「ブループラネット賞」は、今年で8回目を迎えます。本賞は、地球環境保全に関して科学技術の面で著しい貢献をされた個人、または組織を対象として毎年2件贈られるもので、当財団理事会・評議員会は本年度の受賞者を次のように決定しました。

1) ポール・R・エーリック博士 (米国)

生態系の研究で世界的権威の博士は、生物種の保全に必要な新しい学問体系である保全生物学の構築者の一人であり、人間活動が生態系に与える影響や種の絶滅を防止する方策の研究を進展させました。この視点にたつて、地球環境を悪化させる最大の要因が、人口の爆発的増加にあると、世界に先駆けて警鐘を鳴らし、人口抑制の必要性を力説してきました。さらに、種の絶滅や核戦争が地球環境に及ぼす危険性を警告し、問題解決に向けた対策を世界に訴えました。

2) 曲格平教授 (中国)

中国の広大な国土からなる環境を保全しながら経済を発展させてゆくためには、法令により環境の状況を管理することが最も効果的であると考え、中国独自の環境保全の法体系を確立し、あわせて、環境政策・管理システムを構築しました。そして、環境保全計画の策定に必要な自然環境や都市環境の科学的な調査を進めて、そのデータを集積しました。さらに、著述や講演を通して、国民の環境保全に関する意識を高めることに尽力する等、中国の環境保全に貢献してきました。

- 二人の受賞者には、賞状とトロフィー、および副賞として各五千万円が贈られます。
- 表彰式は10月22日(金)に帝国ホテル(東京都千代田区)で挙行政され、10月25日(月)に受賞者による記念講演会が国際連合大学(東京都渋谷区)で開催されます。

※本リリースは、インターネット・ホームページでもご覧いただけます。ご参照ください。

(財)旭硝子財団

〒102-0081 東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ2F TEL(03)5275-0620 FAX(03)5275-0871

E-Mail: post@af-info.or.jp

URL: http://www.af-info.or.jp

※再生紙を使用しています。

受賞の辞

ポール・R・エーリック博士

荣誉あるブループラネット賞をいただき大変光栄に存じます。ほとんどの方を存じ上げています。歴代受賞者のお仲間に入れていただきましたことも大きな喜びでございます。妻のアンと私は長年にわたって、地球の生命維持システムにますます脅威を与え、人間社会が享受している生態系からの恩恵を壊しつつある要因を広範囲に分析して参りました。代表的な要因としては、過剰人口、無駄な消費、欠陥技術の使用、あるいは適切な指導機関や社会、政治、経済の仕組みが欠けていることが挙げられます。中でも、人種や性への差別や経済的不平等は、私達のこれからの文明に暗い陰を投げかけています。新しい世紀に向かって大切なことは、科学者や政界・産業界のリーダーが持続可能な社会を構築するという目的を共有することだと存じます。

私達とスタンフォード大学保全生物学研究センターの研究者は、経済、法律、心理、歴史分野の学者や実業家などの方々と協力して、人類が抱える問題を学際的に解決する方法を模索しており、その成果が徐々に上がってきております。私達は、生態系が施す恩恵の価値を評価すること、衛星画像を使って荒廃した土地の生物多様性を維持する能力を判断すること、また環境や社会問題を解決するために人類の進化から教訓を引き出すこと等、多様な課題に取り組んでおります。この度の受賞は、私達の研究活動に大きな前進をもたらす契機となります。私と妻だけでなく、共同研究者のジョン・ホールドレン博士やグレッチェン・デイリー博士、研究センターの仲間達、さらに地球を人類にとって安寧な棲家として維持するために、私達と一緒に長年にわたって理にかなった方法を生み出してきた多くの友人に賜った賞として感謝申し上げます。ありがとうございました。

曲格平教授

ブループラネット賞をいただき心から感謝申し上げます。30年間にわたって環境保全に携わって参りました私が、このように栄えある賞を賜り大変光栄に存じます。この名誉は私にだけでなく、長年私と力を合わせて働いてきた仲間たちにいただいたものでございます。さらに、この榮譽は、古代文明の継承者であり勤勉な中国の国民、また中国の環境保護を多年にわたって暖かく支えて下さった世界各地の友人すべてのものだと思存じます。

私は、中国の環境問題が直面する厳しい状況を深く認識しております。しかしながら、ある詩人が「危険あるところ、救いの力が自ずから育つ」と詠っておりますが、正に至言で、幸いなことに環境問題が国民の意識を目覚めさせています。今日、環境保護活動はいまだかつて無い規模で中国全土で展開されています。生態環境を保護しながら、持続可能な発展を進展させることこそ正しい選択だと確信しています。

30年という歳月は、歴史の中ではほんの一瞬に過ぎません。しかし、個人の人生においては長い道のりでした。振り返ってみますと、私は生涯で最も良い時代の30年を、世界で最も重要な問題の解決に捧げることができて、本当に幸せです。私はこれからもこの事業のためにたゆまぬ努力を続けて行きます。

この偉大な賞を与えてくださいました旭硝子財団、ならびに選考委員会に心から感謝申し上げます。この榮譽は、私自身に対する最高の激励であり、中国の環境保護に対する暖かいご支援でもございます。ありがとうございました。

ポール・R・エーリック博士 (Dr. Paul R. Ehrlich)

1959年以来40年間にわたってスタンフォード大学で教鞭をとるエーリック博士は、集団生物学*の世界的権威であると共に、アメリカで大きな影響力をもつ代表的なエコロジストです。

博士は、生物消滅の指標とみなされるチョウの集団を35年余にわたって克明に観察して、個体群の盛衰と環境との関係を解析し、生物種の保全のために必要とされる生物学の新領域「保全生物学」の構築者の一人となりました。また、複数の種が互いに生存や繁殖に影響を及ぼし合いながら進化する「共進化」の学問分野を発展させています。これらの研究から、人類もこの進化によって形成されてきた生物多様性の中の一つの種にすぎないので、生物多様性を支える現在の生態系を安定して維持することが、人類の存続にとって不可欠であることを明らかにしました。そして、「生態系から受ける恩恵が存続しなければ文明は存続しえない」という理念を掲げています。1981年に著した「絶滅とそのゆくえ」は、該博な知識と研究成果を駆使して、野生生物の絶滅の危機について一般の人々に注意を喚起し、啓蒙書として極めて高い評価を得ました。

このような視点に立つと、当時起こりつつあった急激な人口増加は生態系を破壊する大きな要因になると考え、1968年に出版した「人口爆弾」で警告しました。“過剰人口という病を患っている地球”を救う唯一の方法は人口抑制であり、人間が消費する資源量に限界があることを、ローマクラブの「成長の限界」が刊行される前に指摘したものです。世界で300万部以上売れた本書は、博士を世界で一躍有名にし、1970年の国連総会で、1974年を「世界人口年」と定め、ブカレストで初の政府間人口会議が開催されるに至る推進力となりました。

博士は人間集団が環境に及ぼす影響の大きさを $I=PAT$ に方式化し、地球環境を悪化させる様々な現象をこの方程式にあてはめて解析しています。人間活動が環境に及ぼす影響(I)は、人口(P)、豊かさ(A、平均的な人間が消費する資源の量)、および科学技術の環境破壊指数(T)の3つの積で表され、健全な環境を維持するためにはこの三要素を減少させるべきだと説いています。そして、人口の大小の尺度は、キャリング・キャパシティ(環境収容力：長期的に資源や環境がもちこたえられる人口)に人口が相対的にみあっているかであり、人類自身が人口抑制を行うことの大切さを説いてきました。近年は、最も重要な人口抑制策は女性の教育と解放にあるとして、女性の地位向上と子供の教育の重要性を世界に訴えています。

生物学での幅広い研究に基づいて地球環境の保全を重要視する博士は、温暖化、酸性雨、オゾン層、砂漠化等、環境を悪化する様々な物理的要因と共に、貧困、核戦争、人種差別等の社会的要因も問題点として指摘しています。1977年に著した「人種爆弾」では、生物学的に人種の知的な違いは存在しないことを説き、人種差別に反対しています。また、1983年には博士が中心となって40名の著名な科学者と共に核戦争が生態系に及ぼす壊滅的な影響の予測について発表し、核戦争の恐怖を警告しました。

博士は、人口、資源、環境の危機に関する一般市民の認識が今なお低いのは、地球の歴史とその機能に関する基本的な理解が不十分であるためだと考え、著作やメディアを通して啓蒙にも努めて

* 同じ生物種で互いに影響を持ちあっている個体集団の動態およびその遺伝的組成の変化を環境との関連で研究する学問

います。今までに研究成果や思索の結果を発表した論文や著作の数は、800件以上にも上ります。

博士のこのように先駆的で広範な研究の中で、生態学者である夫人のアン女史は多くの著作を共同執筆する等、常に博士の良き協力者でした。

現在、博士は、1984年に自ら中心となって設立したスタンフォード大学保全生物学研究センターの所長として、政策コーディネーターのアン夫人等と共に、生物多様性を維持する方策を提唱し、環境保全の専門家に最新の研究状況を教え、さらに、一般市民への啓蒙活動も進めています。

博士は、「地球環境の悪化は人間の行為によってもたらされたものであり、人間の行為によって解決できる」と信じて環境科学を進展させ、長期的な観点に立って環境問題の解決に邁進して、世界の環境保全に大きく寄与しております。

<略歴>

1932	5月29日米国フィラデルフィアに生れる
1953	ペンシルバニア大学卒業
1954	アンと結婚
1955	カンザス大学 修士卒業
1957	〃 博士号取得
1957 - 59	米国国立衛生研究所 プロジェクト研究員
1959 - 62	スタンフォード大学生物学科 助教授
1962 - 66	〃 生物学科 准教授
1966 -	〃 生物学科 教授
1977 -	〃 人口学 Bing 教授
1982	米国芸術・科学アカデミー会員
1984 -	スタンフォード大学保全生物学研究センター 所長
1985	米国科学アカデミー会員
1989 - 90	米国生物学協会会長
1992	ヨーロッパ芸術・科学アカデミー会員

<受賞歴等>

1987	Gold Medal, WWF International
1989	UNEP Global 500 Roll of Honour
1990	Crafoord Prize, Royal Swedish Academy of Sciences
1991	MacArthur Prize Fellowship
1995	UNEP Sasakawa Prize (with Anne)
1996	Heinz Prize for Environment (with Anne)
1998	Tyler Prize for Environmental Achievement (with Anne)

曲 格 平 教 授 (Prof. Qu Geping)

中国は国土が広く、気候も地勢も北から南、西から東へと大きく変化するので、環境問題は極めて多様です。しかも、計画経済から市場経済へと急速に移行して、経済が躍進する過程において、最も重要な課題の一つが環境問題でした。

曲格平教授は、中国の国情にあった環境保全の法体系や管理システムを構築して、環境保全と経済発展を両立させる方法論を生み出すことに尽力しました。

氏は、1972年にストックホルムで開かれた国連人間環境会議に政府代表団のメンバーとして参加して以来、四半世紀以上にわたり一貫して、中国の環境保全に熱心に取り組んできました。

まず、公害の防止や環境の改善には環境管理の強化が不可欠であると考えて、環境法体系を作り上げ、環境政策の枠組みを形成することに力を注ぎました。そして、政策を策定するのに必要な根幹となる環境や天然資源の実態について自ら科学的な調査・解明にあたり、最新のデータを集積しました。

氏のイニシャティブの下、1970年代後半に、中国は中国史上で初めて環境保護を国策に取り入れ、開発重視から効率性重視に政策を転換し、「予防中心」、「汚染者負担の原則」、「環境管理の強化」を環境政策の三本柱に掲げました。これは、経済発展の中で環境破壊が進んだ諸外国の例から学んで、都市型公害を緩和するためには、予防を基本とし、汚染者に期限付きで公害処理を実行させることを目指したものです。環境破壊の責任者を明確にし、汚染物排出量の著しい製品を淘汰し、排出費を徴収し、重度汚染工場を強制的に閉鎖・移転しました。例えば1988年の調査では都市にあった40万箇所の工場の内、25万箇所が環境に深刻な影響を与えることが判明したので、1996年度だけでも6万箇所の工場が閉鎖になりました。

急速な近代化に伴って環境問題が深刻化するにつれて、法令の制定・実施ばかりでなく、研究機関を設置して汚染の監視、技術開発の推進、環境教育等、「科学技術による解決」をベースとして進めました。国内4千箇所に環境汚染を監視する測定装置を設置したのもこの一環です。これらの現実的な対応は高く評価されており、他の発展途上国の良き手本となっています。また、中国は産業エネルギーの三分の二を石炭に依存して世界第四位の温室効果ガス排出国であるので、水力や原子力発電の増設を推進する一方で、旧型石炭ボイラーの技術改良を推進しております。

さらに、中国では膨大な人口が環境悪化に拍車をかけていましたが、氏は人口増加が環境に及ぼす影響に特に注意を払い、1980年代初めに著作により人口の顕著な増加を抑制する政策の必要性を訴え、また家族計画政策についてしばしば講演しました。1980年以来中国の家族計画政策は大きな成功を収めております。

氏は、社会主義国としては新規な手法を用いて、国民の環境意識を向上させています。まず1993年から「21世紀に向けての環境キャンペーン」と題してプレス・キャンペーンを展開して、ジャーナリストに国内の環境問題をありのままに報道させました。例えば過去5年間に6千人のジャーナリストが4万8千件の環境問題を報道し、一般市民に大きな影響を与えました。ジャーナリストは、環境に対して良い業績を残した組織や個人をテレビ、新聞等で賞賛し、そうでない

場合に厳しく批判しました。また、氏が中心となって、全人代環境・資源保護委員会は、土地用法を改正するにあたり、市民を人民大会の討論に招待して、彼らの意見を聞きました。さらに、多数の論文や著作、大学での講演等によっても、環境問題についての国民の関心を高めました。

毎年二桁の経済成長を遂げた中国では、このような氏の尽力により環境悪化が抑制されたにもかかわらず、大気汚染、水質汚濁、騒音等の都市型公害や、土壌浸食、砂漠化、生態系の破壊等、広い分野で深刻な環境問題が指摘されています。しかし、氏は、「これらの環境保全の法律や政策を有効に活用してゆけば、環境は必ず改善されて、青い空ときれいな水が戻る」という信念のもと、保全活動に邁進しております。

<略歴>

1930	6月14日中国山東省に生まれる
1952	山東大学卒業
1957 - 61	保定フィルム工場工場長
1962 - 68	化学産業省部門主任
1968 - 74	国務院計画委員会部門主任
1972	国連人間環境会議に中国代表団として参加
1975 - 76	UNEP 中国代表
1976 - 82	国務院環境保護指導室副長
1982 - 93	国家環境保護局長
1984 -	北京大学教授（非常勤）
1985 -	清華大学教授（非常勤）
1989 -	中国人民大学教授（非常勤）
1990 - 96	中国環境学会会長
1992	地球サミット 中国代表団副団長
1993 -	全人代環境・資源保護委員会委員長
1993 -	中国環境保護産業協会会長
1993 -	中華環境保護基金会理事長

<受賞歴等>

1987	UNEP Gold Medal
1988	国家科学技術進歩 最高賞
1992	UNEP- 笹川環境賞

■ この件に関するお問い合わせ先

(財) 旭硝子財団
担当：国井、日下

東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ2階
TEL:03-5275-0620 FAX:03-5275-0871
E-mail:post@af-info.or.jp URL:http://www.af-info.or.jp

本リリースは再生紙を使用しています。